

氏名(本籍)	なか がわ まこと 中 川 誠(新潟県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1711号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	ウィリアム・ハズリットの「詩と真実」 —モンテーニュの友として—
主査	筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 井上修一
副査	筑波大学教授 D. L. 川那部保明
副査	筑波大学教授 森田 孟

論文の内容の要旨

本論文は、イギリス・ロマン派のエッセイストにして文学批評家ウィリアム・ハズリットをモラリストの系譜に位置づけ、彼があみだした文章道と彼の実人生との相克を考察し、「人と言葉」の普遍的な意味を解明するものである。本論文の構成は、以下のとおりである。

序文

第1部 モラリスト・ハズリット

第1章 モンテーニュ『エッセー』英訳とハズリット三代

第2章 ハズリットと18世紀イギリス国会の雄弁家たち

第3章 人と文体

第4章 モラリストのシェイクスピア批評——ジョンソンとハズリット

第2部 人間ハズリット

第5章 ハズリットの人間教育論

第6章 「旅を往く」(On Going a Journey)——ハズリットの旅と人生

第7章 『リベール・アモリス』(Liber Amoris)——ハズリットの恋

結論

Bibliography

初出一覧

梗概 (Synopsis)

第1部では、ハズリットがいかにモラリスト・モンテーニュに魅了され、彼に発する近代エッセイの伝統をいかに継承したかが追求されている。

第1章では、モンテーニュの『エッセー』の特質とその英訳者たち、とりわけフロリオとコトンの功績が明らかにされ、エッセイストのハズリットの分身たるモラリスト・ハズリットの誕生の背景が論じられている。第2章では、18世紀イギリス国会の演説と文人ハズリットの接点がたどられている。この時期は、イギリス国会史上空前絶後の雄弁政治家が輩出したが、その代表者であるチャタム伯、パーク、フォックス等とハズリットとの関係が追求され、とりわけ彼の文章道はパークに影響されたことが詳述されている。第3章では、彼の文章道の

特質が追求され、とりわけ彼と彼のあいしたルネサンス期の絵画・彫刻との関係が論じられている。彼はそれらが発する風味と力を‘gusto’と呼び、それを自己の文章道の核としたとされている。第4章では、シェイクスピアを軸に、18世紀の大文人ジョンソン博士とハズリットの関係が追求され、二人にどのような意味をもっていたかが論じられている。

第2部では、実人生のハズリットの際だった特質が追求され、その特質と彼の文学との関係が論じられている。

第5章では、生来、内向的で人間嫌いの傾向をもったハズリットが、モンテーニュ、さらにはモンテーニュが愛読したプルタルコスを尊敬したのは、懐疑的・厭世的人間観と人間の教育と改善の可能性を希求する彼らの姿勢にあったからであるとし、理想と現実の矛盾に苦悩するハズリットが論じられている。ロマン派ハズリットが誕生したのは、ロマン派詩人コウルリジとの出会いがあったからであるが、第6章では、コウルリジに招かれ隠棲地へと赴く一人旅の道中を描いたエッセイ「旅を往く」を読解しつつ、この佳作が、一見青春賛歌と見られるものの、その背後には、彼の不運な人生に対する深い悔恨が織り込まれていると論じられている。自らのことを語るのを嫌ったハズリットが、自らの恋愛経験を告白する例外的な作品『リベール・アモリス』は、人間ハズリットを知るうえで最上のものであるが、第7章では、この作品をハズリットの告白や慰めのためのもではなく、普遍的人間性を描いた作品として読み、彼の‘gusto’が、どのように女性に対してほとばしりてたかが論じられている。

結論では、古代の古典を尊ぶモンテーニュの姿勢を継承したハズリットは、モンテーニュにならい、自分がいかなる人間であるかを正直に書くならば、それは普遍的人間性を書くことになることと信じ著作活動をおこなったとし、彼の文章道が彼の人間観と不分離の関係にあると主張し、本論は、混沌の世紀を預言するロマン派の時代に生きたハズリットの人と生涯と文章が、現代のわれわれにいかなる意味をもつかを追求したものであると総括している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ロマン派の代表的なエッセイストであるウィリアム・ハズリットを、モンテーニュからはじまるモラリストのエッセイの系譜に位置づけ、彼がその伝統をいかに継承し、彼の置かれた時代的・個人的状況からどのようにみずからの文章、もしくは文学を形成していったかを論考したものであり、日本はもとより、欧米でも数少ないハズリット研究に寄与する意欲作である。

本論の学界への貢献は、つぎの3点にまとめることができる。

その第1は、プルタルコスやセネカの倫理論集の影響をうけ、その傾向の集大成をしたモンテーニュの系譜に属するものとして、ハズリットのエッセイを位置づけたこと。これにより、彼のエッセイが、単に、ロマン派の枠にとどまることなく、また、英国のエッセイの伝統の枠をこえ、大きな長い西欧のモラリストの系譜に接木され、幅広い視野のもとで彼のエッセイが読まれることになったこと。

第2は、ハズリットのエッセイ、あるいは彼の文章が、彼の生と不可分であることが示され、彼の文学の本質的特質が‘gusto’にあることが明確化されたこと。

第3は、自分を語りたがらなかったハズリットが書いた告白的なエッセイが、実は、個人的な苦悩の昇華をめざしたのではなく、理想と現実の矛盾の相克をめざしていた普遍的人間性を描いていることを指摘し、ハズリット文学の今日における意味を示唆したこと。本論文は、このような学問的貢献をしてはいるものの、若干の問題も残されている。その第1は、若い頃、ハズリットが傾倒したルソーの影響、つまり、モンテーニュ理解がルソー経由であった可能性もあるが、それを捉える視点が欠落していること。第2は、著者が余りにもハズリットに傾倒するあまり、ややもすると主観的な判断を下し、主観的な描写をおこなう傾向のあること。

本論文は、これらの課題を残すものではあるが、著者の長年にわたる読解の成果が十分に生かされた精緻な著

作であり、また、ハズリットを世界文学的な場に位置づけることによって、今後の新しい読解を誘発する力をもつ魅力的な著作として、学界に大きな地歩を占めるものと認められる。

よって、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。